児童自立支援施設における性的問題（ｾｸｼｭｱﾙﾏｲﾉﾘﾃｨ）を抱えた児童に対する支援方法確立に向けた実態および職員の意識調査

―児童ひとりひとりの人権が尊重される支援を目指して―

石澤　方英（児童自立支援施設　千葉県生実学校）　　尾﨑　万帆子（常磐大学大学院被害者学研究科）

<要　旨>

近年、児童福祉施設（児童養護施設・児童自立支援施設）では施設内における児童間の性的問題が表面化している。その原因の多くは性的欲求や性的関心ではなく、「性」を手段とした力関係の誇示、いわば性暴力である。児童福祉施設ではこの性暴力を受けた被害児童が結果として加害児童に転じてしまうといった「負の連鎖」が続いている。そして児童養護施設で性的問題を起こした児童が児童自立支援施設に措置変更されてくるといった状況は年々増加傾向にある。その一方で、児童自立支援施設には性的課題（ｾｸｼｭｱﾙﾏｲﾉﾘﾃｨ）を抱えた児童の入所依頼または入所が少しずつではあるが全国的に見られるようになっている。このような状況の中、現状として児童自立支援施設では性的課題を抱えた児童に対して特別な支援方法もなく、入所を拒否するといった状況も起きている。社会的弱者である性的課題（ｾｸｼｭｱﾙﾏｲﾉﾘﾃｨ）を抱えた児童を受け入れるためにはどのような対策、支援が必要なのかを事前に検討しておく必要がある。これは児童ひとりひとりの人権が尊重される支援にもつながると思われる。そのため、この研究では性的課題を抱えた児童への支援方法確立を目指し、全国の児童自立支援施設（58 施設）を対象に実態調査および職員の意識調査を行ったものである。その結果として多くの施設が性的課題を抱えている児童の入所への準備を行っておらず、対応は困難と考えている職員も多いということが浮き彫りになった。そのため、今後はこの調査結果をもとに児童自立支援施設でも児童ひとりひとりに人権が尊重された上での性的課題を抱えた児童の受け入れが可能になるような支援方法を確立できるよう、さらなる検討を進めていきたい。

<キーワード>

児童福祉施設（児童養護施設・児童自立支援施設）・性的課題・セクシュアルマイノリティ・人権

【はじめに】

まず、この研究を進める上での児童自立支援施設について説明したい。児童自立支援施設とは児童福祉法に基づき非行少年（触法少年・犯罪少年・虞犯少年）を主として生活指導が必要と認められる少年が入所する施設である。以前の児童福祉法改正により教護院から名称が変更され、改正後は発達障害を有する児童の入所が増加している。

現在、児童自立支援施設では施設内における児童間の性的問題が表面化している。性的

問題の対応に職員や児相は追われている状況も見られる。そして、この性的問題への対応策などは現在児童福祉関係者の急務の課題として検討されている。この性的問題と共に少しずつではあるが今後対応が必要と思われる新たな課題が出てきている。それは性的課題（ｾｸｼｭｱﾙﾏｲﾉﾘﾃｨ）を抱えた児童への支援である。現状では少数ではあるが、全国的に性的課題を抱えた児童の入所依頼または入所が見られるようになっている。性的課題を抱えた児童に対して現状では生物学的な性差により入所する寮が決められ、児童ひとりひとりの人権は守られていないと言わざるを得ない。しかし支援方法について何も議論されず、検討されていない現状では現場がこれ以上の支援をすることが困難である状況は間違いない。

社会情勢を考えると、自身がセクシュアルマイノリティであることをカミングアウトした場合に社会的に受容されていく可能性は今後さらに高くなると思われ、そのことから児童についてもカミングアウトしていたり、自身の性的課題を自認している子の入所も増加する可能性も十分に考えられる状況である。しかし現状では児童ひとりひとりの人権を尊重した支援はできていないことから事前に支援方法を議論しておくことは急務の課題であると言える。性的課題（ｾｸｼｭｱﾙﾏｲﾉﾘﾃｨ）はなかなか注目されずにないがしろにされてしまいがちであるため、今日まで話題にすらあがることは少なかった。しかし、今後性的課題を抱えた児童の入所もその可能性が十分に考えられる状況下では、その支援方法を確立していくことが児童ひとりひとりの人権を尊重することにもつながると考えられる。

そのため、この研究では全国の児童自立支援施設（５８施設）を対象にその実態と職員の意識調査を予備調査としての位置付けで行うことで、性的課題（ｾｸｼｭｱﾙﾏｲﾉﾘﾃｨ）を抱えた児童に対する支援方法を確立するための一助としていきたい。

※法的根拠

児童自立支援施設

「不良行為をなし、又はなすおそれのある児童および家庭環境その他の環境上の理由により生活指導等を要する児童を入所させ、又は保護者の下から通わせて、個々の児童の状況に応じて必要な指導を行い、その自立を支援し、あわせて退所した者についての相談その他の援助を行うことを目的とする施設」（児童福祉法第４４条）

【実態調査】

今回の実態調査では全国の児童自立支援施設において性的課題（ｾｸｼｭｱﾙﾏｲﾉﾘﾃｨ）を抱えた、また疑われる児童が実際にどのくらい在籍し、どのような支援を展開しているのかの現状を、そしてそれと同時に職員が性的課題を抱えた児童への支援方法についてどのように考えているのかという意識調査も実施した。意識調査は今後の支援方法確立のために、セクシャルマイノリティへの知識・理

解と受け入れに関する可否などその傾向を調査することを目的としている。

① 調査方法

アンケート用紙における調査（郵送）

②配布施設

児童自立支援施設　58 施設

③アンケートの配布状況

（施設の状況）

施設長または施設代表者　1 名

合計　58 部

（職員の意識調査）

施設職員各施設　6 名

合計　348 部

④回収率

（施設の状況）

総数　45 部（77.6%）

（職員の意識調査）

総数　284 部（81.6%）

※調査結果※

○施設長または施設代表者宛

【貴施設にｾｸｼｭｱﾙﾏｲﾉﾘﾃｨだと確認できている児童は何名いますか？】

トランスジェンダー

	最小値	最大値	平均値
男子(n=45)	0	5	0.11
女子(n=45)	0	1	0.02
全体(n=45)	0	6	0.13

同性愛

	最小値	最大値	平均値
男子(n=44)	0	0	0.00
女子(n=44)	0	0	0.00
全体(n=44)	0	0	0.00

【貴施設にｾｸｼｭｱﾙﾏｲﾉﾘﾃｨが疑われる児童は何名いますか？】

トランスジェンダー

	最小値	最大値	平均値
男子(n=43)	0	1	0.05
女子(n=43)	0	0	0.00
全体(n=43)	0	1	0.05

同性愛

	最小値	最大値	平均値
男子(n=43)	0	3	0.09
女子(n=43)	0	1	0.02
全体(n=43)	0	3	0.12

【貴施設ではｾｸｼｭｱﾙﾏｲﾉﾘﾃｨの児童に対してどのような処遇や配慮を行っていますか？指導上抱えている困難も含めて自由に記述をお願い致します。】

トランスジェンダー

・現在特に配慮していることはない。

・①集団生活ではあるが、なるべく個別指導を心がけている（寮舎内）（洗面、トイレ、風呂、等は一人で行動。就寝時は、職員がつく）②本館での活動やクラブ活動等でもなるべく多くの職員がつき、指導している。

・発達障がい（軽度疑）を念頭に置いて、一般入所児童と同一処遇を行っている。担当寮長寮母には発達特性（障がい特性）を考慮した指導をお願いしている。

同性愛

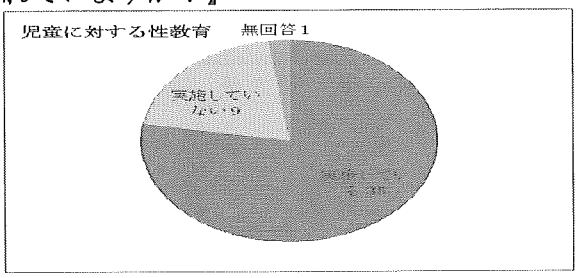
・性加害児と性被害児を同室の居室にしない。性加害児が他児に対して距離が近い場合は、注意を促すとともに職員が気をつけている。児相の心理司による性加害部分のプログラム実施。性教育など

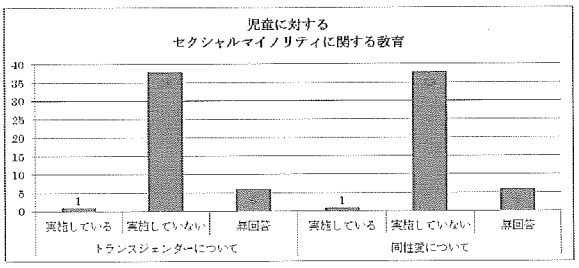
・特に意識をさせないようにしている。居室編成に配慮している。スポーツや生活などに目標をもたせて、生活させている。

・関係性の障害であることを前提に、他児との関係や距離に注意し、問題が起こる前に、個別対応することを考えると同時に、一時保護、医療対応も視野に入れている。

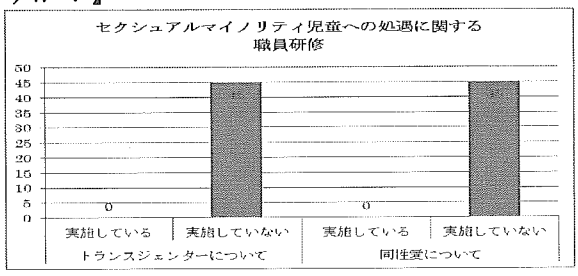
【貴施設では児童に対する性教育（生教育）を実施していますか？実施している場合、そ

の内容にｾｸｼｭｱﾙﾏｲﾉﾘﾃｨに関する事項は含まれていますか？】



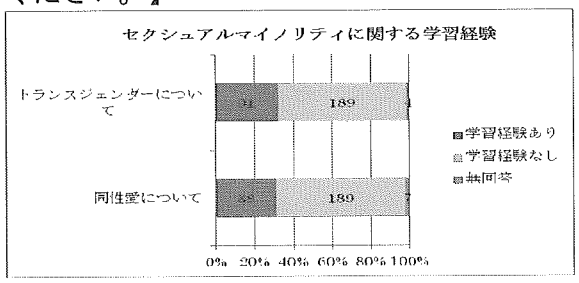


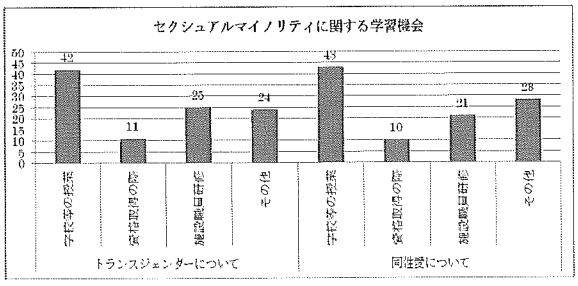
【貴施設ではｾｸｼｭｱﾙﾏｲﾉﾘﾃｨを抱えた児童への処遇に関連する職員研修を実施していますか？】



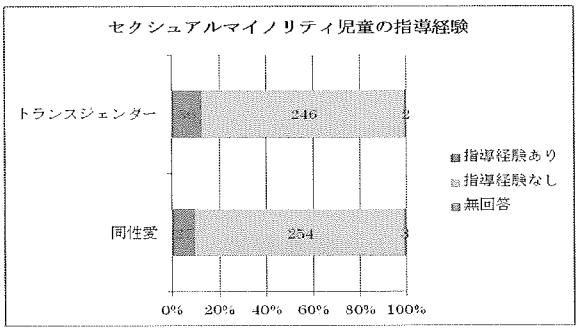
○施設職員への意識調査

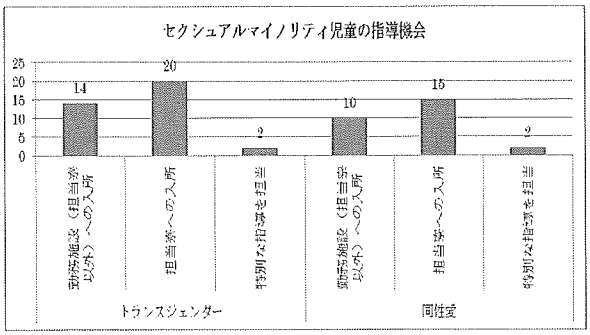
【これまでにｾｸｼｭｱﾙﾏｲﾉﾘﾃｨについて、学んだことはありますか？ある場合には、その機会についてあてはまるもの全てに○をつけてください。】



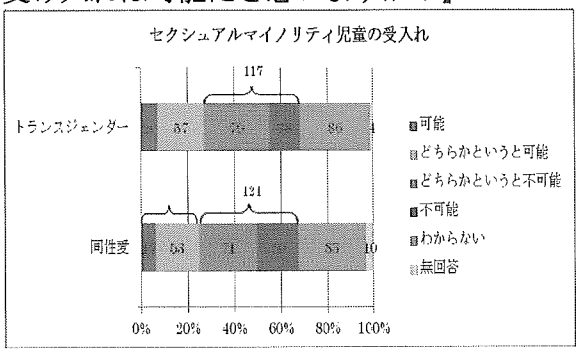


【これまでにｾｸｼｭｱﾙﾏｲﾉﾘﾃｨ児童への指導経験はありますか？ある場合には、あてはまるもの全てに○をつけてください。】



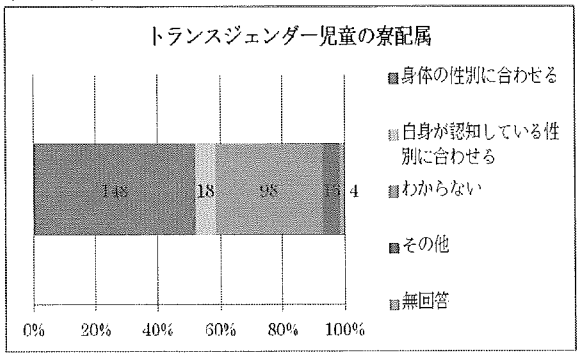


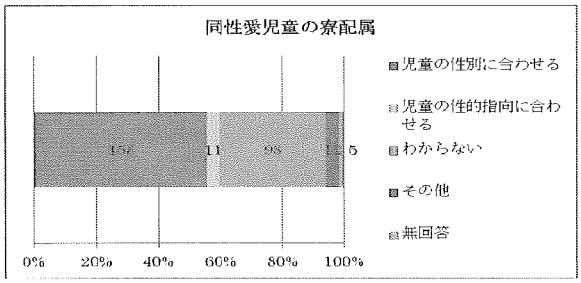
【ｾｸｼｭｱﾙﾏｲﾉﾘﾃｨ児童の入所以来があった場合、あなたの勤務する施設において、児童の受け入れは可能だと思いますか？】

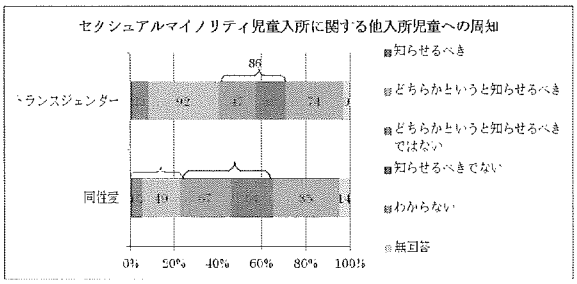


【ｾｸｼｭｱﾙﾏｲﾉﾘﾃｨ児童への処遇についてうかがいます。】

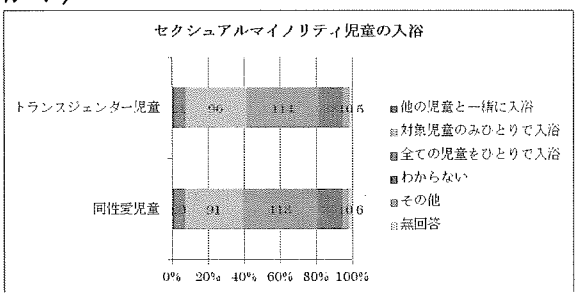
（児童の寮配属はどうするべきだと思いますか？）



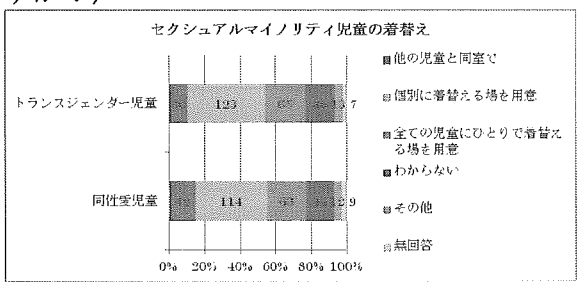




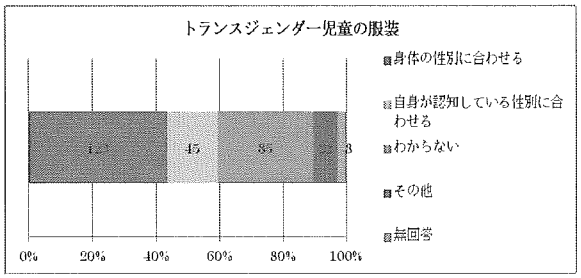
（児童の入浴はどうするべきだと思いますか？）



（児童の着替えはどうするべきだと思いますか？）

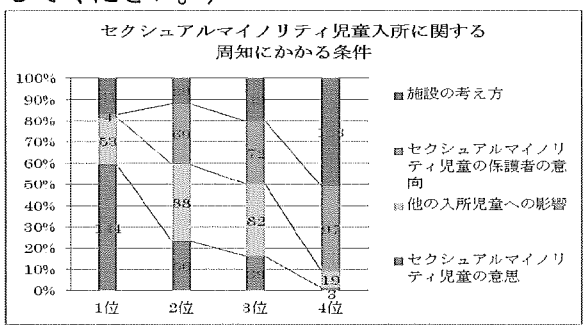


（トランスジェンダー児童の服装はどうするべきだと思いますか？）



【セクシュアルマイノリティと思われる該当児童がいた場合の他の入所児童への対応についてうかがいます。】

（他の入所児童に対して、セクシュアルマイノリティ児童の入所を知らせるべきだと思いますか？）



（他の入所児童に対して、セクシュアルマイノリティ児童の入所を知らせる場合、以下の事項のうち、あなたが考える優先順位を記入してください。）

○検証結果

① セクシュアルマイノリティ児童受け入れについての考え方」に連関性をもつ要素

「セクシュアルマイノリティという言葉の認知」と「セクシュアルマイノリティ児童受け入れについての考え方」の連関性を見るためにカイ二乗検定を行なったところ、トランスジェンダー児童の受け入れ（$\chi 2=0.336, p>0.05$）、同性愛児童の受け入れ（$\chi 2=0.592, p>0.05$）共に有意差は見られなかった。

次に「セクシュアルマイノリティに関する学習経験」と「セクシュアルマイノリティ児童受け入れについての考え方」の連関性を見るためにカイ二乗検定を行なったところ、「トランスジェンダーに関する学習経験」と「トランスジェンダー児童受け入れについての考え方」（$\chi 2=0.002, p<0.01$）、「同性愛に関する学習経験」と「同性愛児童の受け入れについての考え方」（$\chi 2=0.000, p<0.001$）双方とも有意差が見られた。

	Q-2トランスジェンダー×Q-5トランスジェンダー			
	可能・どちらかというと可能	不可能・どちらかというと不可能	わからない	合計
学習経験あり	35	38	17	90
	38.9%	42.2%	18.9%	100.0%
学習経験なし	40	78	68	186
	21.5%	41.9%	36.6%	100.0%
$\chi 2=0.002, p<0.01$				

この結果と残差を見ると、トランスジェンダーに関する「学習経験あり」グループにトランスジェンダー児童の受け入れは「可能・どちらかというと可能」が多く「わからない」が少なく、「学習経験なし」グループに「可能・どちらかというと可能」が少なく「わからない」が多いと解釈できる。

Q-2同性愛×Q-5同性愛	可能・どちらかというと可能	不可能・どちらかというと不可能	わからない	合計
学習経験あり	34 40.0%	36 42.4%	15 17.6%	85 100.0%
学習経験なし	34 18.7%	81 44.5%	67 36.8%	182 100.0%
$\chi 2$=0.000, p<0.001				

また同性愛に関しても同様に「学習経験あり」グループに同性愛児童の受け入れは「可能・どちらかというと可能」が多く「わからない」が少なく、「学習経験なし」グループに「可能・どちらかというと可能」が少なく「わからない」が多いと解釈できる。

次に、「セクシュアルマイノリティとの接触経験」と「セクシュアルマイノリティ児童受け入れについての考え方」の連関性を見るためにカイ二乗検定を行なったところ、「トランスジェンダーとの接触経験」と「トランスジェンダー児童受け入れについての考え方」には有意差が見られなかった（$\chi 2$=0.102, p>0.05）が、「同性愛者との接触経験」と「同性愛児童の受け入れについての考え方」については有意差が見られた（$\chi 2$=0.000, p<0.001）。

Q-3同性愛×Q-5同性愛	可能・どちらかというと可能	不可能・どちらかというと不可能	わからない	合計
接触経験あり	35 42.7%	31 37.8%	16 19.5%	82 100.0%
接触経験なし	35 18.8%	89 47.8%	62 33.3%	186 100.0%
$\chi 2$=0.000, p<0.001				

この結果と残差を見ると、同性愛者との「接触経験あり」グループに同性愛児童の受け入れは「可能・どちらかというと可能」が多く「わからない」が少なく、「学習経験なし」グループに「可能・どちらかというと可能」が少なく「わからない」が多いと解釈できる。

次に「セクシュアルマイノリティ児童への指導経験」と「セクシュアルマイノリティ児童受け入れについての考え方」の連関性を見るためにカイ二乗検定を行なったところ、「トランスジェンダー児童への指導経験」と「トランスジェンダー児童受け入れについての考え方」（$\chi 2$=0.033, p<0.05）、「同性愛児童への指導経験」と「同性愛児童の受け入れについての考え方」（$\chi 2$=0.003, p<0.01）双方とも有意差が見られた。

Q-4トランスジェンダー×Q-5トランスジェンダー	可能・どちらかというと可能	不可能・どちらかというと不可能	わからない	合計
指導経験あり	15 42.9%	15 42.9%	5 14.3%	35 100.0%
指導経験なし	62 24.4%	102 41.8%	80 32.8%	244 100.0%
$\chi 2$=0.033, p<0.05				

この結果と残差を見ると、トランスジェンダー児童への「指導経験あり」グループにトランスジェンダー児童の受け入れは「可能・どちらかというと可能」が多く「わからない」が少なく、「指導経験なし」グループに「可能・どちらかというと可能」が少なく「わからない」が多いと解釈できる。

Q-4同性愛×Q-5同性愛	可能・どちらかというと可能	不可能・どちらかというと不可能	わからない	合計
指導経験あり	12 48.0%	12 48.0%	1 4.0%	25 100.0%
指導経験なし	58 23.5%	108 43.7%	81 32.8%	247 100.0%
$\chi 2$=0.003, p<0.01				

また同性愛に関しても同様に「指導経験あり」グループに同性愛児童の受け入れは「可能・どちらかというと可能」が多く「わからない」が少なく、「指導経験なし」グループに「可能・どちらかというと可能」が少なく「わからない」が多いと解釈できる。

最後に、「性差観得点」と「セクシュアルマイノリティ児童受け入れについての考え方」の連関性を見るためにカイ二乗検定を行なったところ、「性差観得点」と「トランスジェンダー児童受け入れについての考え方」には有意差が見られなかった（$\chi 2$=0.372, p>0.05）が、「同性愛児童の受け入れについての考え方」については有意差が見られた（$\chi 2$=0.002, p<0.01）。

Q-9×Q-5同性愛	可能・どちらかというと可能	不可能・どちらかというと不可能	わからない	合計
点数低群	46 35.4%	45 34.6%	39 30.0%	130 100.0%
点数高群	22 17.2%	67 52.3%	39 30.5%	128 100.0%
$\chi 2$=0.002, p<0.01				

この結果と残差を見ると、性差観得点の「点数低群」に同性愛児童の受け入れは「可能・どちらかというと可能」が多く「わからない」が少なく、「点数高群」に「可能・どちらかというと可能」が少なく「わからない」が多いと解釈することができる。

②「セクシュアルマイノリティ児童への処遇についての考え方」に連関性をもつ要素

「セクシュアルマイノリティという言葉の認知」と「セクシュアルマイノリティ児童への処遇についての考え方」の連関性を見るためにカイ二乗検定を行なった結果、トランスジェンダー児童の処遇については、「トランスジェンダー児童の部屋割」（$\chi 2=0.186$, $p>0.05$）「トランスジェンダー児童の入浴」（$\chi 2=0.050$, $p>0.05$）「トランスジェンダー児童のトイレ使用」（$\chi 2=0.464$, $p>0.05$）「トランスジェンダー児童の着替え」（$\chi 2=0.330$, $p>0.05$）「トランスジェンダー児童の服装」（$\chi 2=0.277$, $p>0.05$）「トランスジェンダー児童の学校授業と作業日課における対応」（$\chi 2=0.269$, $p>0.05$）いずれも有意差は見られなかった。また「トランスジェンダー児童の寮配属」についてはクロス表で期待度数5未満のセルが全体の20%より多く見られたためフィッシャーの直接確立検定を行なったところ有意差は見られなかった（$p=0.451>0.05$）。

一方、同性愛児童の処遇については、カイ二乗検定を行なった結果「同性愛児童の部屋割」（$\chi 2=0.467$, $p>0.05$）「同性愛児童の着替え」（$\chi 2=0.179$, $p>0.05$）いずれも有意差は見られず、「同性愛児童の寮配属」についてもフィッシャーの直接確立検定を行なった結果有意差は見られなかった（$p=0.164>0.05$）。しかし、カイ二乗検定を行なった結果「同性愛児童の入浴」（$\chi 2=0.017$, $p<0.05$）「同性愛児童のトイレ使用」（$\chi 2=0.049$, $p<0.05$）については有意差が見られ、「同性愛児童の学校日課と作業日課における対応」についてもフィッシャーの直接確立検定を行なった結果有意差が見られた（$p=0.016<0.05$）。

Q-1×Q-6③同性愛

	他の児童と一緒に入浴	対象児童のみひとりで入浴	全ての児童をひとりで入浴	わからない	その他	合計
認知あり	9	65	93	30	9	208
	4.4%	31.6%	45.1%	14.6%	4.4%	100.0%
認知なし	11	26	25	9	1	72
	15.3%	36.1%	34.7%	12.5%	1.4%	100.0%

$\chi 2=0.017$, $p<0.05$

Q-1×Q-6④同性愛

	他の児童と同じトイレを使用させる	個別にトイレを用意する	わからない	その他	合計
認知あり	131	30	38	10	209
	62.7%	14.4%	18.2%	4.8%	100.0%
認知なし	37	6	19	8	70
	52.9%	8.6%	27.1%	11.4%	100.0%

$\chi 2=0.049$, $p<0.05$

次に、「セクシュアルマイノリティに関する学習経験」と「セクシュアルマイノリティ児童への処遇についての考え方」の連関性を見るためにカイ二乗検定を行なった結果、トランスジェンダー児童の処遇については、「トランスジェンダー児童の入浴」（$\chi 2=0.490$, $p>0.05$）「トランスジェンダー児童の着替え」（$\chi 2=0.153$, $p>0.05$）には有意差が見られなかったが、「トランスジェンダー児童の寮配属」（$\chi 2=0.002$, $p<0.01$）「トランスジェンダー児童の部屋割」（$\chi 2=0.047$, $p<0.05$）「トランスジェンダー児童のトイレ使用」（$\chi 2=0.047$, $p<0.05$）「トランスジェンダー児童の服装」（$\chi 2=0.000$, $p<0.001$）「トランスジェンダー児童の学校授業と作業日課における対応」（$\chi 2=0.003$, $p<0.01$）については有意差が見られた。

Q-2同性愛×Q-6①同性愛

	児童の性別に合わせる	児童の性的指向に合わせる	わからない	その他	合計
学習経験あり	57	3	18	7	85
	67.1%	3.5%	21.2%	8.2%	100.0%
学習経験なし	99	7	77	4	187
	52.9%	3.7%	41.2%	2.1%	100.0%

$\chi 2=0.003$, $p<0.01$

この結果と残差を見ると、トランスジェンダーに関する「学習経験あり」グループにトランスジェンダー児童の寮配属について「自分が認知している性別に合わせる」「その他」が多く、「わからない」が少なく、「学習経験なし」のグループに「自分が認知している性別に合わせる」「その他」が少なく、「わからない」が多いと解釈することができる。

Q-2トランスジェンダー×Q-6②トランスジェンダー

	他の児童と同室	対象児童のみひとり部屋	全ての児童をひとり部屋	わからない	その他	合計
学習経験あり	17	38	17	8	9	88
	19.3%	42.0%	19.3%	9.1%	10.2%	100.0%
学習経験なし	21	80	33	40	11	185
	11.4%	43.2%	17.8%	21.6%	5.9%	100.0%

$\chi 2=0.047$, $p<0.05$

Q-2トランスジェンダー×Q-6④トランスジェンダー

	他の児童と同じトイレを使用させる	個別にトイレを用意する	わからない	その他	合計
学習経験あり	53	19	11	7	90
	58.9%	21.1%	12.2%	7.8%	100.0%
学習経験なし	96	28	50	12	186
	51.6%	15.1%	26.9%	6.5%	100.0%

$\chi 2=0.047$, $p<0.05$

	Q-2トランスジェンダー×Q-6⑥トランスジェンダー				
	身体の性別に合わせる	自身が認知している性別に合わせる	わからない	その他	合計
学習経験あり	39 45.3%	23 26.7%	13 15.1%	11 12.8%	86 100.0%
学習経験なし	82 44.1%	21 11.3%	72 38.7%	11 5.9%	186 100.0%
$\chi 2$=0.000, p<0.001					

「学習経験あり」グループにトランスジェンダー児童の服装について「自身が認知している性別に合わせる」が多く、「わからない」が少なく、「学習経験なし」グループに「自身が認知している性別に合わせる」が少なく、「わからない」が多いと解釈することができる。

一方、同性愛児童の処遇については、カイ二乗検定を行なった結果「同性愛児童の入浴」（$\chi 2$=0.389, p>0.05）、「同性愛児童のトイレ使用」（$\chi 2$=0.175, p>0.05）「同性愛児童の着替え」（$\chi 2$=0.212, p>0.05）いずれにも有意差は見られなかった。しかし、「同性愛児童の寮配属」（$\chi 2$=0.003, p<0.01）「同性愛児童の部屋割」（$\chi 2$=0.0012, p<0.01）については有意差が見られ、「同性愛児童の学校日課と作業日課における対応」についてもフィッシャーの直接確率検定を行なった結果有意差が見られた（p=0.049<0.05）。

	Q-2同性愛×Q-6①同性愛				
	児童の性別に合わせる	児童の性的指向に合わせる	わからない	その他	合計
学習経験あり	57 67.1%	3 3.5%	18 21.2%	7 8.2%	85 100.0%
学習経験なし	99 52.9%	7 3.7%	77 41.2%	4 2.1%	187 100.0%
$\chi 2$=0.003, p<0.01					

この結果と残差を見ると、「学習経験あり」グループに同性愛児童の寮配属について「児童の性別に合わせる」「その他」が多く、「わからない」が少なく、「学習経験なし」グループに「児童の性別に合わせる」「その他」が少なく、「わからない」が多いと解釈することができる。

	Q-2同性愛×Q-6②同性愛					
	他の児童と同室	対象児童のみひとり部屋	全ての児童をひとり部屋	わからない	その他	合計
学習経験あり	12 14.3%	33 39.3%	15 17.9%	11 13.1%	13 15.5%	84 100.0%
学習経験なし	15 8.0%	89 47.6%	37 19.8%	37 19.8%	9 4.8%	187 100.0%
$\chi 2$=0.012, p<0.05						

次に、「セクシュアルマイノリティとの接触経験」と「セクシュアルマイノリティ児童への処遇についての考え方」の連関性を見るためにカイ二乗検定を行なった結果、トランスジェンダー児童の処遇については、「トランスジェンダー児童の部屋割」（$\chi 2$=0.155, p>0.05）「トランスジェンダー児童の入浴」（$\chi 2$=0.120, p>0.05）「トランスジェンダー児童のトイレ使用」（$\chi 2$=0.970, p>0.05）「トランスジェンダー児童の着替え」（$\chi 2$=0.066, p>0.05）「トランスジェンダー児童の服装」（$\chi 2$=0.323, p>0.05）「トランスジェンダー児童の学校授業と作業日課における対応」（$\chi 2$=0.202, p>0.05）いずれにも有意差は見られなかった。また、「トランスジェンダー児童の寮配属」についてもフィッシャーの直接確率検定を行なった結果有意差は見られなかった（p=0.152>0.05）。

一方同性愛児童の処遇については、「同性愛児童の入浴」（$\chi 2$=0.060, p>0.05）「同性愛児童の着替え」（$\chi 2$=0.273, p>0.05）には有意差が見られなかったが、「同性愛児童の部屋割」（$\chi 2$=0.001, p<0.01）「同性愛児童のトイレ使用」（$\chi 2$=0.004, p<0.01）「同性愛児童の学校授業と作業日課における対応」（$\chi 2$=0.002, p<0.01）で有意差が見られた。また、「同性愛児童の寮配属」についてもフィッシャーの直接確率検定を行なった結果有意差が見られた。（p=0.011<0.05）

	Q-3同性愛×Q-6①同性愛				
	児童の性別に合わせる	児童の性的指向に合わせる	わからない	その他	合計
接触経験あり	60 71.4%	3 3.6%	18 21.4%	3 3.6%	84 100.0%
接触経験なし	96 50.8%	8 4.2%	76 40.2%	9 4.8%	189 100.0%
p=0.011<0.05					

この結果と残差を見ると、「接触経験あり」グループに同性愛児童の寮配属について「児童の性別に合わせる」が多く、「わからない」が少なく、「接触経験なし」グループに「児童の性別に合わせる」が少なく、「わからない」が多いと解釈することができる。

	Q-3同性愛×Q-6②同性愛					
	他の児童と同室	対象児童のみひとり部屋	全ての児童をひとり部屋	わからない	その他	合計
接触経験あり	13 15.5%	41 48.8%	15 17.9%	4 4.8%	11 13.1%	84 100.0%
接触経験なし	14 7.4%	81 43.1%	38 20.2%	44 23.4%	11 5.9%	188 100.0%
$\chi 2$=0.001, p<0.01						

「接触経験あり」グループに同性愛児童の部屋割について「他の児童と同室」と「その他」が多く、「わからない」が少なく、「接触経験なし」グループに「他の児童と同室」と「その他」が少なく、「わからない」が多いと解釈することができる。

	Q-3同性愛×Q-6④同性愛				
	他の児童と同じトイレを使用させる	個別にトイレを用意する	わからない	その他	合計
接触経験あり	65	9	8	3	85
	76.5%	10.6%	9.4%	3.5%	100.0%
接触経験なし	102	27	44	15	188
	54.3%	14.4%	23.4%	8.0%	100.0%
$\chi 2$=0.004, p<0.01					

「接触経験あり」グループに同性愛児童のトイレ使用について「他の児童と同じトイレを使用させる」が多く、「わからない」が少なく、「接触経験なし」グループに「他の児童と同じトイレを使用させる」が少なく、「わからない」が多いと解釈することができる。

次に、「セクシュアルマイノリティ児童への指導経験」と「セクシュアルマイノリティ児童への処遇についての考え方」の連関性を見るためにカイ二乗検定を行なった結果、トランスジェンダー児童の処遇については、「トランスジェンダー児童の部屋割」（$\chi 2$=0.586, p>0.05）「トランスジェンダー児童のトイレ使用」（$\chi 2$=0.079, p>0.05）「トランスジェンダー児童の着替え」（$\chi 2$=0.379, p>0.05）「トランスジェンダー児童の服装」（$\chi 2$=0.123, p>0.05）いずれにも有意差は見られなかった。また、フィッシャーの直接確率検定を行なった結果「トランスジェンダー児童の入浴」（p=0.459>0.05）「トランスジェンダー児童の学校授業と作業日課における対応」（p=0.322>0.05）についても有意差は見られなかった。一方「トランスジェンダー児童の寮配属」についてはフィッシャーの直接確立検定を行ったところ有意であった（p=0.008<0.05）。

一方同性愛児童の処遇については、フィッシャーの直接確率検定を行なった結果、「同性愛児童の寮配属」（p=0.087>0.05）「同性愛児童の入浴」（p=0.139>0.05）「同性愛児童のトイレ使用」（p=0.766>0.05）「同性愛児童の着替え」（p=0.392>0.05）に有意差が見られなかった。「同性愛児童の部屋割」（p=0.045<0.05）「同性愛児童の学校授業と作業日課における対応」（p=0.028<0.05）は有意差が見られた。

	Q-4トランスジェンダー×Q-6①トランスジェンダー				
	身体の性別に合わせる	自分が認知している性別に合わせる	わからない	その他	合計
指導経験あり	27	1	5	3	36
	75.0%	2.8%	13.9%	8.3%	100.0%
指導経験なし	120	17	93	13	243
	49.4%	7.0%	38.3%	5.3%	100.0%
p=0.008					

この結果と残差を見ると、「指導経験あり」グループにトランスジェンダー児童の寮配属について「身体の性別に合わせる」が多く、「わからない」が少なく、「指導経験なし」に「身体の性別に合わせる」が少なく、「わからない」が多いと解釈することができる。

最後に、「性差観得点」と「セクシュアルマイノリティ児童への処遇についての考え方」の連関性を見るためにカイ二乗検定を行なった結果、トランスジェンダー児童の処遇については、「トランスジェンダー児童の寮配属」（$\chi 2$=0.209, p>0.05）「トランスジェンダー児童の部屋割」（$\chi 2$=0.420, p>0.05）「トランスジェンダー児童の入浴」（$\chi 2$=0.110, p>0.05）「トランスジェンダー児童のトイレ使用」（$\chi 2$=0.112, p>0.05）「トランスジェンダー児童の着替え」（$\chi 2$=0.349, p>0.05）「トランスジェンダー児童の服装」（$\chi 2$=0.050, p>0.05）「トランスジェンダー児童の学校授業と作業日課における対応」（$\chi 2$=0.311, p>0.05）といずれにも有意差は見られなかった。

③「セクシュアルマイノリティ児童の入所に関する他の児童への周知についての考え方」に連関性をもつ要素

「セクシュアルマイノリティという言葉の認知」と「セクシュアルマイノリティ児童の入所に関する他の児童への周知についての考え方」の連関性を見るためにカイ二乗検定を行なったところ、トランスジェンダー児童の受け入れ（$\chi 2$=0.210, p>0.05）、同性愛児童の受け入れ（$\chi 2$=0.955, p>0.05）共に有意差は見られなかった。

次に、「セクシュアルマイノリティとの学習経験」と「セクシュアルマイノリティ児童の入所に関する他の児童への周知についての考え方」の連関性を見るためにカイ二乗検定を行なったところ、「同性愛者に関する学習経験」と「同性愛児童受け入れについての考え方」には有意差が見られなかった（$\chi 2$=0.423, p>0.05）が、「トランスジェンダーに関する学習経験」と「トランスジェンダー児童の受け入れについての考え方」については有意差が見られた（$\chi 2$=0.005, p<0.01）。

Q-2トランスジェンダー×Q-7トランスジェンダー	知らせるべき・どちらかというと知らせるべき	知らせるべきでない・どちらかというと知らせるべきでない	わからない	合計
学習経験あり	46 53.5%	27 31.4%	13 15.1%	86 100.0%
学習経験なし	68 36.6%	58 31.2%	60 32.3%	186 100.0%

$\chi 2=0.005$, $p<0.01$

この結果と残差を見ると、「学習経験あり」グループにトランスジェンダー児童の入所について「知らせるべき・どちらかというと知らせるべき」が多く、「わからない」が少なく、「学習経験なし」に「知らせるべき・どちらかというと知らせるべき」が少なく、「わからない」が多いと解釈することができる。

「セクシュアルマイノリティとの接触経験」と「セクシュアルマイノリティ児童の入所に関する他の児童への周知についての考え方」の連関性を見るためにカイ二乗検定を行なったところ、「トランスジェンダーとの接触経験」と「トランスジェンダー児童受け入れについての考え方」には有意差が見られなかった（$\chi 2=0.123$, $p>0.05$）が、「同性愛者との接触経験」と「同性愛児童の受け入れについての考え方」については有意差が見られた（$\chi 2=0.006$, $p<0.01$）。

Q-3同性愛×Q-7同性愛	知らせるべき・どちらかというと知らせるべき	知らせるべきでない・どちらかというと知らせるべきでない	わからない	合計
接触経験あり	18 22.5%	47 58.8%	15 18.8%	80 100.0%
接触経験なし	46 25.0%	72 39.1%	66 35.9%	184 100.0%

$\chi 2=0.006$, $p<0.01$

この結果と残差を見ると、「接触経験あり」グループにトランスジェンダー児童の入所について「知らせるべきでない・どちらかというと知らせるべきでない」が多く、「わからない」が少なく、「接触経験なし」グループに「知らせるべきでない・どちらかというと知らせるべきでない」が少なく、「わからない」が多いと解釈することができる。

最後に「性差観得点」と「セクシュアルマイノリティ児童の入所に関する他の児童への周知についての考え方」の連関性を見るためにカイ二乗検定を行なったところ、トランスジェンダー児童の受け入れ（$\chi 2=0.747$, $p>0.05$）、同性愛児童の受け入れ（$\chi 2=0.428$, $p>0.05$）共に有意差は見られなかった。

【今後の方向性】

今回の全国調査においてはｾｸｼｭｱﾙﾏｲﾉﾘﾃｨという関心が低く、実数も多くない視点での調査だったこともあり回収率は低いことも予想していた。しかし結果としては非常に高い回収率となった。これは今後確実に議論していかなければならない課題であり、現状としてその対応に苦慮している状況にあるからと考えられる。今回は施設の状況だけでなく職員の意識調査を行ったことで現場が悩んでいることも浮き彫りとなった。そして児童福祉という社会において、性的課題を抱えた児童が差別されることのない状況を作りたい。上記調査結果からもわかるように学習経験を積むことがｾｸｼｭｱﾙﾏｲﾉﾘﾃｨの理解につながる可能性は明らかであることから、まずは職員の意識を変えることを目的としてｾｸｼｭｱﾙﾏｲﾉﾘﾃｨに関する学習機会を現場レベルで増やしていくことがその第一歩になると思われる。今後はこの調査結果をもとにｾｸｼｭｱﾙﾏｲﾉﾘﾃｨについて学習できるような研修等を各地または全国規模で実施できるよう尽力し、性的課題を抱えた児童への支援方法確立を目指していきたい。

【謝辞】

このたびのアンケート調査におきまして、全国自立支援施設の施設長様をはじめ、多くの職員の方々にはご多用のところ調査主旨にご賛同ならびにご協力をいただきありがとうございました。また、このような研究機会を与えてくださった貴財団に心より御礼申し上げます。